要　約

論文題目　イコンとヴィジョンのあわいに
——ルネサンス末期シエナにおける絵画・政治・宗教——

氏　　名　松原 知生

本論文は、1555 年の共和国滅亡を中心とする前後約 1 世紀におけるシエナ絵画の展開を、同時代の政治的・宗教的コンテクストとの関連において考察するものである。都市国家シエナの政治的命運は、イタリア戦争の影響下、僭主制の崩壊と党派間の抗争の激化、神聖ローマ帝国の影響力拡大などにより大きく変転し、最終的にはフィレンツェとの戦争に敗北、メディチ家支配下に編入されるに至った。かかる政治的動乱は、折しも勃発した宗教改革とも連動し、聖母マリアの無原罪懐胎についての論争を中心とするさまざまな宗教的抗争を惹き起こした。こうした不穏な社会情勢のもと、霊験あらたかな古き礼拝像（イコン）、および聖なるものの幻視像（ヴィジョン）という、ルネサンス的な絵画表象の枠組みから逸脱する２つの現前的イメージに対する関心が高まった。本論文では、イコンとヴィジョンが当時の宗教文化においていかなる役割を果たし、両者の多様な関係性が画家たちによってどのように視覚化されたのかを追跡する。

論文全体は４部構成で、各部はそれぞれ３つの章から成る。まず第Ⅰ部では、画家ドメニコ・ベッカフーミが、その活動の初期に当たる 1510 年代に制作した３点の祭壇画を詳しく分析する。第１章では《聖三位一体と聖者たち》、第２章では《シエナの聖女カテリーナの聖痕拝受》、第３章では《玉座の聖パウロ》をそれぞれ考察することで、若きベッカフーミが、枠（フレーム）・雲・幕（ヴェール）という３つのいわば「パレルゴン的」な装置を通じて、聖なるもののヴィジョンの顕現を巧みに演出するとともに、それらのヴィジョンが観者あるいは画中人物が崇拝すべきイコンであるようにも見えるという、きわめて曖昧で両義的な効果を創出していたことを明らかにする。イコンともヴィジョンとも断定することができないこの決定不可能性にこそ、宗教画におけるベッカフーミの「奇想」は向けられていたと考えられる。

これらのベッカフーミ作品は、とりわけその画面構成において、中世絵画を思わせるアルカイックな要素を多分に含んでいるが、続く第Ⅱ部では、15 世紀末から 16 世紀半ばに

かけてのシエナ絵画における古画の再活用とプリミティヴ様式の再導入という問題を扱う。まず第４章では、中世のイコンを切断して小型化した上で、石造のタベルナクルム（聖龕）の中央にはめ込んでその崇拝を演出するという、当時流行した祭壇装飾とその歴史的背景について論じる。次いで第５章では、マニエリスム全盛期にあってあえてクワトロチェント的な古様を意図的に選択した画家ジョヴァンニ・ディ・ロレンツォの活動に光を当て、彼の「前ラファエッロ主義的」的な作品が同時代的文脈（特にフィレンツェとの間で勃発した 1526 年の「カモッリーアの戦い」）において果たした政治的役割を分析する。さらに第６章では、古画のリサイクルとプリミティヴ回帰という２つの問題系を統合した事例として、いわゆる「サンタ・マルタの修道女たち」の作とされてきた一連の絵に光を当てる。15 世紀的な古拙な画風と中世的な技法を駆使し、いにしえのイコンの周囲を枠づける付随的な装飾画として制作された板絵群には、古画「を」画中に同化すると同時に、自ら古画「に」同化しようとする、アナクロニックな同一化への二重の衝動が看取される。これらの作例を分析することにより、古き聖画像にリフレーミングを施して新しい（物理的・象徴的）コンテクストへと固定し、その宗教的価値を不動のものとするだけでなく、それらを政治的な文脈へといわば可動化＝動員することをも狙った、当時のプリミティヴ再評価が秘めていた両義的な性格が明らかにされる。

他方、古画への同化ではなく、それがもつ異化効果を強く打ち出したのが第Ⅲ部のテーマ、すなわち「絵画タベルナクルム」とよばれる特異な絵画ジャンルである。近世的な手法（マニエラ・モデルナ）で描かれた優美なタブローの中央に開口部を設け、古様による中世のイコンをそこに埋め込むことにより、後者の聖なるアウラやいにしえのメディウムがもつ現前性が対比的に強調されることになる。絵画タベルナクルムではしばしば、古画がその場に顕現したかのような演出が行なわれるが、これはある意味で、第Ⅰ部で論じたヴィジョンと第Ⅱ部で扱ったイコンが重ね合わされ圧縮されているともいえる。さらに第Ⅱ部で見た「固定＝不動化」と「動員＝可動化」の両義的メカニズムがより先鋭的に作動するのもこのジャンルである。これらの点を明らかにすべく、第７章と第８章では、ソドマが 1530 年代、シエナのドメニコ会修道院の付属聖堂のために制作した２点の絵画タベルナクルムを採り上げ、当時の社会を揺るがした２つの闘争（無原罪懐胎をめぐる論争、および神聖ローマ皇帝カール５世がシエナに派遣したスペイン人駐留兵と市民との軋轢）の渦中に位置づけて解釈することを目指す。続く第９章では、シエナとその周辺領域における実地調査に基づき、ソドマ以後の絵画タベルナクルムの作例を可能な限り網羅的に紹

介、その展開を通観し、今後の個別研究のためのカタログを提供する。

スペイン兵とシエナ市民との不和は「シエナ戦争」へと発展し、最終的には 1555 年、スペインとフィレンツェの連合軍によってシエナは陥落、共和国は滅亡する。第Ⅳ部では、この歴史的カタストロフィーと同時代のシエナ絵画との関連について考察する。第 10 章では、シエナ戦争時の都市防衛を担当した画家・軍事技師ジョルジョ・ディ・ジョヴァンニが共和国滅亡前後に手がけた２点の宗教画を採り上げ、敗戦に直面したジョルジョを苛んだトラウマとそれに対する防衛機制が画中でいかに作動しているかを跡づける。第 11 章では、ジョルジョの次世代に属する画家たち（カゾラーニ、ヴァンニ、マネッティら）の宗教画に描き込まれたシエナの都市表象において、町の治安を監視していたメディチ要塞がしばしば構図から排除されていることに着目し、このような「検閲」には、敗戦の苦い経験がシエナというトポスにもたらしたパトス（受苦＝情念）の発現が認められることを指摘する。作品ごとにみられる反／親メディチの揺らぎは、喪われた共和国への郷愁を抱きつつもメディチ家支配の環境下で生きざるを得なかった、彼らの困難なタブルバインド状態の現れであろう。最後に第 12 章では、戦後のシエナ絵画においてイコン／ヴィジョンがもちえた政治的意義を逆照射すべく、支配者側のフィレンツェがその重要性を十分に把握した上で「流用」していると考えられるケースについて検証する。敗北したシエナの市民感情におそらく配慮して、戦後シエナにおけるフィレンツェ出身の芸術家たちの活動はかなり限定されていたことが、先行研究によって指摘されてきたが、実際には例外的な作品が複数存在すること、またそれらの画中には、新たな支配者であるメディチ家のコジモ１世の姿や同家の紋章が頻繁に描き込まれ、勝者のイデオロギーや支配意識が色濃く反映していることが詳らかにされる。

各章における以上のような個別的考察を踏まえ、結論では、ルネサンス末期のシエナ絵画が、過去と現在、表象と現前、イコンとヴィジョンなど、複数の対立を裡に孕んだ、いわば「弁証法的」なイメージであり、両極間の揺らぎや葛藤あるいは「論争」こそがその史的展開を駆動していたことを述べて、論文全体の総括とする。